



Title	日本語における「言いさし文」の統語論的構造及び語用論的機能 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	大山, 隆子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13401号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74492
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Takako_Ohyama_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 大 山 隆 子

主査 教 授 加 藤 重 広
審査委員 副査 教 授 池 田 証 壽
副査 教 授 野 村 益 寛

学位論文題名

日本語における「言いさし文」の統語論的構造及び語用論的機能

当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は、日本語における言いさし文の統語語用論的研究の成果である。従来の研究では、「言いさし」を日本語記述文法の枠組みで論じることが多く、その成果には既にまとまったものがある。また、語用論の知見を利用した研究や、社会言語学的な関心からの研究成果も散見される。しかし、本論文は、形態論や統語論といった形式や構造の面からまず言語事実を整理し、そのあとに意味論や語用論の知見から機能や意味の分析を行っている点で、非常に手堅い統語語用論の研究である。しかも、形態や統語構造に関する一般言語学的知見を発展させ、非従属化(*insubordination*)として日本語の言いさしを捉え直している点で、新機軸の研究といえることができる。

非従属化は、英語では生じない従属節の自立化が主節の省略によって生じるドイツ語との対照観察から提唱されたものであるが、通言語学的に見ると、左方部主要型が多い SEA 諸語に比して、右方部主要性が強い日本語では、従属節が先行することから、あらかじめ非従属化を決めなくても発話の途中で非従属化を起こす柔軟性や構造の可塑性が高いことが指摘されている。関連する先行研究を踏まえ、本論文では、従属節を提示したあとで主節の提示を取りやめる省略型の非従属化に加えて、主節（相当の節）を提示したあとでそのまま完結させずに接続助詞を付け足す付加型の非従属化を新たに提案した枠組みを用いており、これは今後の言いさし研究にも活用できる重要な提案である。

日本語では、節と句の明確な形態論的区分がないこともあり、意味論的な区分基準は提案されているが、両者がある程度整理しておく必要があるため、本論文では連用形と連用て形（連用形に接続助詞*テ*を後接させた形）が近い性質を持ちながら、対立関係を保持し、不完全な中和しか生じさせない点も確認している。この問題は、動詞複合や活用の形態論、一般言語学的に言う「副動詞」現象とも関わるため難しい面がある。さらに、テンス分化の有無や南文法で規定する節の階層カテゴリーなどを踏まえておくことが不可欠であり、先行研究に批判的検討を加えて、分析のレディネスを確保している。

本論文の中核テーマである「し」による言いさしは、まずその基本機能を連言性と措定し、そこからの逸脱、先行研究に対する語用論からの批判を行っている。さらに、「し」の言いさしが一種の付加型の非従属化と説明できること、顕示的な連言形式でなくとも、潜在的な連言性が背景化してある種の推意を慣習的に形成する可能性、などを指摘している。日本語の構文推意について、今後の研究の方向性を決める重要な提言を含んでいる。

「たり」は同様に言いさし文を作るが、テンス分化を持たない従属節を形成し、「たり」を後接させた従属節全体が自立性を持って名詞節相当になる点など、「し」と大きく異なる特性があることを整然と指摘している点は、重要な成果と認められる。「たり」の基本機能を選言性と措定した上で、選言性からの逸脱やその条件も観察してまとめ、「たり」の言いさし形式の慣習化なども観察している。さらにそのメタ語用論的機能も談話標識の本質論を掘り下げながら論じている。「～たりする」が形式上選言性を満たさなくとも、背景化した選言性からネガティブポライトネスの効

果を有する点、それが聞き手との距離を保持する際に多用される動機である点など、重要な主張が示されている点は注目に値する。言いさしは「から」「ので」などの因果関係の接続助詞を用いるものが多いことから、先行研究は少なくないが、本論文でも因果関係を表さない用法や、語用論的機能などについて掘り下げ、「し」による言いさしとの対照比較も行っている。

また形式上の言いさしに含めることのできる「って」など引用辞による言いさしも関連事象を含めて分析し、「って」が「と」と異なるメタ語用論的機能を発達させていること、「し」とパラディグマティックな関係を形成しつつ、異なる談話効果を有することなどを指摘している。最後に、終助詞・間投助詞の「ね」「よ」と「し」の機能差を論じているが、これらは分布関係が異なることから単純な範列関係性をなさず、掘り下げる余地を残している。

全体として新しい指摘や提言を含んでいる点で重要な研究成果であるが、一方で、論証の余地を残している部分、関連事象をもっと広範に議論できる部分、記述に冗長さが見られることなど問題点もある。しかし、これらの問題点は、今後発展させるべき課題でもあり、論文の価値を大きく損なうものとは言えない。

学位授与に関する委員会の所見

上述のように、いくつかの重要な新たな分析・指摘・提言を含んでおり、今後掘り下げるべきテーマや論考をさらに高度化すべき余地を残していないわけではないが、種々の独自性を有し、相応の研究成果をもたらしたと認めることができる。

審査委員会では、本論文の研究上の貢献を認め、博士（文学）の学位を授与すべきことを認定した。